
小さな探偵君達

NT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな探偵君達

【Nコード】

N0674B

【作者名】

NT

【あらすじ】

コナン、歩美、元太、光彦、哀のメンバーでちょっとした心理的な物語

第1話：歩美の心・・・（前書き）

コナン、歩美、元太、光彦、哀のメンバーで今ゲームをしている。
そのゲーム中にいろんなことをおきる！？

第1話：歩美の心・・・

歩美はいつもコナン君の横顔みてるんだけど女の感なのかいいつも私に振り向いてくれないの・・・。

たぶん。。。

薄く雲を覆うように哀ちゃんがやってきたんだけどコナン君のこといろいろと知ってみるみたいだからすごく心配。

たまに哀ちゃんとコナン君の二人だけが知ってる会話してそうで怖い・・・。

歩美自身って哀ちゃんを嫉妬してるのかな・・・。

「ゆ・・・ちゃ・・・。」

「・・・（何か聞き覚えのある声）・・・。」

「あゆ・・・ちゃん・・・。」

「・・・（歩美を呼ぶのは誰！？）・・・。」

「あゆみ・・・ん・・・。」

「・・・（えっ！？この声はコナン君！？）」

「あゆみちゃん・・・！？」

「コッ、コナン君！？」

「次歩美ちゃんの番だよ。」

「あっ！うん！」

コナンの手からコントローラが手渡された瞬間に少しだけコナンの温もりの痕跡を感じ取れることが出来たまだコントローラ自体がまだ忘れることがないようにコナンの温もりをそのまま送り出してくれたように・・・。

「歩美のやりたがってた仮面バイバーゲームじゃねか！」

「ごっ、ごめん！」

「その前に元太君がなかなか換わらないからですよ！結構いい面まで行ったのは褒めますがね・・・。」

ガチャガチャ・・・

コップとコップが当たる音が聞こえてくる中哀は人数分のお茶を持ってきてくれたのだ。

「あら、やっと小嶋君終わったのね。」

お茶を置いた瞬間に一番に手を伸ばしたのは元太だ！

続く・・・

~~~~~始めまして~~~~~

初めて小説を書くのですが皆さんのご感想聞けることを楽しみにしています。

作者のNTでした。

## 第2話：お茶

「待ってたぜ！俺のジュース！」

「元太君これはジュースではなくてお茶。しかもこれは博士の家のお茶なので『俺の』って言うのもおかしいと思いますけど……。」

光彦はいつものように人差し指を立てながら元太に訂正文をおこなう。

コナンはその様子を横から聞き入っていた。

そんな横に歩美はゲームをするどころかお茶の入ったコップをコナンに渡すべきか迷っていた。

位置的に言うとお茶のコップを取るにはコナンは歩美を跨いで取るしか方法がない為だ！

—— コナン君からコントローラ渡されたんだから今度は私からコナン君にお茶を渡すチャンス！少しは私のこと振り向いてくれるかもしれない。——

「……コッ、コナン君……。」

「……江戸川君……。」

二人の声が一瞬重なって聞こえてきた。

その声の主は哀と歩美の声、コナンは二人の間に座ってた為に左右見渡し様子を確かめていた。

それを他所に歩美はいろんな考えが浮かび上がってくる。

—— 哀ちゃん・・・！？

どうして・・・！？

しかも右手にはお茶が入ったコップ！？

まさか歩美と同じ考え持ってたの！？

「あつ、ああ・・・サンキュー、灰原。」

どうも哀に越されたみたいだ。

—— 悔しいな・・・また哀ちゃんに越されちゃった・・・。  
この場所から逃げ出したい・・・今すぐに。。。。

~~~~~ 続く~~~~~

第2話：お茶（後書き）

毎回読んでくれる方、初めて読まれる方へ
作者のNTです。

とうとう第二章を公開！

って言われても続き物になるのですが・・・

第3話：側にいて・・・（前書き）

歩美の気持ちからこんな行動に！？

第3話：側にいて・・・

歩美の考えも他所にゲーム音はいつもと変わりなく鳴り続けている。

歩美は力が抜けたようにコントローラを床に置き、滑らせるように元太の前に運んで思いも寄らぬ言葉が流れてきた。

「歩美、もうゲームいいよ。今度にする！」

「歩美ちゃん！？どうしたんですか？？急に。。。」

普通に一緒にいててわかる態度に光彦は歩美の目を確かめようかとしたがなかなか確かめるところか歩美の目は考えごとでもしてるかのように思えた

「歩美はなんともないよ・・・ゲームは元太君の方がうまいし先が長く見えて面白いし！」

さすがの名探偵も事件の犯人は^{ターゲット}見透かしても乙女心が見破れなかったみたいだ。

コナン君、気が付いて・・・歩美のことを。。。

歩美の心の叫びに気が付けない・・・名探偵。

——コナン君をこのまま抱き締めたら歩美の気持ちわかる！？

歩美の右手をコナンの左腕までゆっくりと伸ばそうとしてもまだ気が付かない。

。。。あと5cm。。。。

——コナン君。。。——

。。。あと4cm。。。。

——あなたに触れてみたい。——

。。。あと3cm。。。。

——歩美にしたらこれ以上近づけるのも疑問。。。——

。。。あと2cm。。。。

——お願いコナン君！側に行かせて！——

コナンの心にはある人のことが心配なことも知らずに・・・

近づく歩美。。。

それを側で見てる哀。。。

そんな三人の姿を心配そうに見てる光彦、元太。。。

——コナン君

・・・今あなたの側には今誰がいますか！？
・・・私が見えてますか！？——

~~~~~続く~~~~~

### 第3話：側にいて・・・（後書き）

続きお待ちいただいて方。

大変お待たせしました！

やっと続編、第三章：側にいて・・・

内容的にはかなりしっくりこない感じになってしまったかも・・・  
でもここまで読んでくれる方はとても嬉しい限りです！

#### 第4話：心の会話！？（前書き）

前回まで歩美の心が書かれてましたがその理由も明らかになるかも  
！？

#### 第4話：心の会話！？

バック音には仮面ヤイバーのゲーム音が流れてる間にみんなは自然に心の声を会話してるかのように時が過ぎていく感じに流れていく。時たま通るバイクのエンジン音や車やバイクが通り過ぎる音が流れるだけで何も邪魔に出来るものが存在しない中、元太、光彦、歩美、コナン、哀が自然に心の会話をしてるように感じられる……。

\*\*\*\*\*

……コナン君、お願い気が付いて！

俺には予想付かなかった。

歩美の一つ一つが俺に対する愛情表現とは知らなかった……。灰原に聞くまで。

私は知ってた。吉田さんの行動に……。だから彼に伝えてみたの。だって鈍いんだもの。それに彼の中にあの人しか見えてない……。。

僕だって気が付いてました。歩美ちゃんの気持ち……。彼女にはコナン君しか見えないことに……。



#### 第4話：心の会話！？（後書き）

続き気になってた方！

いよいよ、元太、光彦、コナン、哀の本音が！？

続きはどうなるかはお楽しみくださいね。

（すみません。リアルの事情で更新が遅れます・・・。）

第5話：元気出せ！元太。（前書き）

ゲームの間に心の会話してた元太、光彦、哀、コナン、歩美・・・。  
その後どんなことが起きるかお楽しみください。

## 第5話：元氣出せ！元太。

「元太君！何やってるんですか！？」

一番に気が付いたのは光彦

「あれ！？もしかして俺と同じ場所で終わり！？」

その声に反応するかのように元太は批判に切り替わる。

「不器用なコナンと一緒にするな！俺の場合は操作ミスだ！」

「操作ミスより周りが気になって失敗したんじゃない！？」

元太はまるで自分を援護するように発言していたのが何もかも見透かした哀の発言により元太はしおれた花のように顔は下を向いてしまった。

「元太落ち込むなよ！」

あいつは冷静に発言しすぎるとは言えずにコナンは元太をフォロ―するが・・・。

逆効果のように花の菊が折れそうでいかにも座ってるだけでもやつの状態で追い詰められる元太。

「・・・（ゲームが下手なコナンに言われても元氣が出ないぞ。俺は。。。）」

元太はコナンの発言が聞こえてないのか反応もなく気持ちだけで会話ししてる最中。

その場を割り込むかのように歩美の声が聞こえてきたのだ。

「そうだよ。元太君。私だってその面で死ぬ場合があるんだから。落ちこまないで！」

「やっぱりそうだよな！」

歩美の声でまるで枯れかけた水をやったように元気で明るい顔に戻った元太。

—— やっぱり俺の中には歩美しかいねえ！ ——

その場を壊さずにとあるところから携帯のマナーの震えるような音が聞こえてきたのだ。

~~~~~ 続~~~~~

第5話：元気出せ！元太。（後書き）

やっと第五章公開！

『いや・・・。』

遅かったよ・・・。

待ちくたびれたよ・・・。』

って方、リアルの事情で遅れてるのでご理解願います。

週に一回は更新して行こうかと思うのでよろしくお願いします。

第6話：時間・・・（前書き）

携帯のマナー音が聞こえた空気の中何が起こるのか・・・

第6話：時間・・・

ブー・・・。

ブー・・・。

ブー・・・。

「・・・（何！？歩美の近く！？）・・・。」

マナー音に一番気が付いたのは歩美だった。

聞こえる音を探し当てるとコナンの手が視界に飛び込んできた瞬間にコナンは急にその場に立った。

「わりい、ちよつと俺電話。」

「まさか蘭姉さんですか！？コナン君。」

「たぶん。」

コナンは携帯の着信画面を見ずに適当なことを答えた。

その携帯の着信画面がもしかしたら『蘭ねえちゃん』ではなく新一の幼じみの『蘭』で表示されてるかもしれないのを避けてわざと携帯を出さなかったのも皆は不思議がらなかった。

「まさか門限が三時だから蘭姉さんに帰って来いの電話か！？」

みんなは一瞬時計を確かめてみて三時だと言う事に確かめた。元太の言うとおり時計の針が三時になっている。

「ありえますね。こんな時間で呼び出す方ですからコナン君は僕達

によく黙って出かけるのと同じ方法を取ったに違いありません……。

元太と光彦の推理にいつもの行動がわかってきたのかコナンを見透かしたように言われコナンの言葉からは『おめえらな……』しか言えなかった。

——ブー……。

——ブー……。

——ブー……。

「それより早く出てしまわないと逆効果じゃないの??」

「そうですね!僕達には遠慮なくここで電話してもかまないですよ。僕達が何とかフォローしますから。」

「いいよ。この部屋に出て電話しておくよ。俺の番はしばらくパスしておいてくれていいからよ。」

そう言った後にコナンは部屋から出て行った。

コナンが出て行って二十分は経とうとしていた。

時刻も三時三十分になろうとしている。

平然に流れる空気の中で歩美はまだ帰ってこないコナンに不安の心が動いていた。

第6話：時間・・・（後書き）

大変お待たせしました！

かなり更新が遅れてしまいました・・・。

続きが気になった方すみません。

リアルの事情でかなり遅れてしました。

実はパスワードとIDのメモが行方不明なっていたのが大重症だったのですが何とか更新できて良かったです！

次回もよろしくお願いします。

第7話：行動（前書き）

コナンの不振な行動！？

元太達はどんな行動を起こすのかごらん下さい。

第7話：行動

「なあ、コナンの奴なんか遅くないか!？」

時計を見ながら会話を始めたのが元太だった。

「そうですね。まだ電話中かもしれないのもう少し様子みましょう!」

「まさかあいつどつかの事件がこの近所に有ったから見に行ったんじゃないか・・・!？」

「ありえますね。抜け駆けは彼の得意分野みたいですから。」

まるでコナンの行動が見えてるかのように元太と光彦は話始めた。その横に居た歩美がその二人の会話の途中で発言を投げかけようとする。

偶然同じ言葉で『あの・・・。』発言が響いてきた。

――哀ちゃん!?

――吉田さん!?

歩美と哀のコンビ中のように同時に呼びかけてしまい光彦と元太の二人の顔はキョロキョロと動かすしかない行動に走っていた。

『あの・・・、えっ・・・！？』

二度目も自然に合った言葉に二人は顔を見合わせる。

まるで一卵性双子のような動きと発言。二人の行動がタドタドしく動きはじめてきた。

それを予知していたのかその後ろから聞き覚えのある声が流れてきた。

「わりい、わりい、遅くなっちまって。」

「遅いぞ！コナン！」

「そうですよー！」

さすが男同士の会話は軽く話を弾ませながら迎える声。

歩美の目には少し涙ぐんで見え。

哀の目には何もかも見透かしたような笑みと瞳。

—— 外形は子供で好奇心な男の子が部屋から出た時と戻ってきた彼の顔はまるで別人の顔に見えたわ。まるで高校生の自分が戻ったかのように・・・。

それは悪い意味ではなく一時高校生の自分を戻したって証拠。
あなたがそれを忘れぬ限り追いかけてあなたが言う真実にたどりつく
為の力の一つ。

時にはあなたを苦しめ逃げられない現実にたどりつけなくてもそれで
もあなたは真実を追いかけるの！？

あなたの口から教えて・・・、工藤君。

私のイメージからではなくてあなたの声から・・・。

第7話：行動（後書き）

続きがかなり気になってた方大変お待たせしました。

リアルではかなり忙しくなってしまうなかなか更新できずじまいになってました。

更新は不安定ですがまた次回の編でもよろしければよろしく願います。

第7話【裏】：行動（前書き）

『第七話【裏】：行動』って言うのは『第七話：行動』の内容をよく読んでいただければわかると思います。読者の皆さんパニック落ちない為に何度も読み返してみてくださいね。

それではスタートです！

第7話【裏】：行動

俺の携帯のマナーモードが震えた。

自然的に携帯から手を伸ばせなかった・・・。

いやな予感がしたんじゃない。ただ単に携帯のディスプレイ画面やサブプレイ画面の表示名が『蘭』って着信だったら歩美や元太、光彦にどう言い訳したらいいのかわからなかっただけのこと。

「・・・！？・・・」

——「やべえ、気づかれた！歩美ちゃんに・・・！？」——

俺は勘付かれと思い自然的にその場で立ち上がってしまった・・・。

「わりい、ちよつと俺電話。」

「まさか蘭姉さんですか！？コナン君。」

「たぶん。」

わりい、光彦・・・。蘭姉ちゃんではなく工藤新一宛の蘭なんだ・・・。

光彦や元太、歩美それに灰原の会話には少し馬鹿らしく結構当たり前のように流せる奴やが実に心の助け舟の役目になってるかもしれない。

コナンは携帯片手に部屋に出て行くが誰も質問することすら思いつくことがなく仮面ヤイバーゲームにはまり始めた。

コナンがようやく携帯の電話が取れたのが博士がいつもパソコンの前で気持ち良く寝てる場所の近くらへんのソファア―。

俺はソファア―に気を許したように体を沈めてから電話に耳を傾け始めた。

その場所は大きな窓が見え日光浴出来そうな場所。

博士がよだれをたらして寝てる姿が残像が現れる感じだ。

今回はその選挙権のように寝てる彼の姿はなく、ソファア―の前らへんに置いてある机の上には同じような区内の地図がいくつも広げて置いてる時点からとハガキの散らかりようの様子から見るとたぶん何か当選して場所がわからず調べ上げた感じだろう。

今見えてることを推理しながら落ち着いて電話の内容を聞いていたがはっきり言う内容的にはよく覚えていない。

園子がいたずら半分で蘭の携帯を使い俺に電話してきたらしいから。

その際に聞いた蘭の声は高校生相手の口調の言葉遣い。

俺はというと偽りの高校生の俺の声。

その電話だけで10分ぐらいの会話。

以外に早くすぎた感じの電話、気が付いたら携帯画面を閉じていた。

俺はあのガキ共の集団に戻ろうと足を運ばせる。

「戻るだろうかまたガキの自分の演技に・・・」
不安が脳裏に過ぎる中、歩美と灰原の声が扉の反対側に聞こえてきた。

『あの・・・、えっ・・・！？』

話の流れはつかめなかったが俺は部屋に流れ込むように会話に乱入した。

でも自然的に『わりい、わりい、遅くなっちまって。』の発言しか言えなかった。

「遅いぞ！コナン！」

「そうですよ〜！」

あいらは怒鳴るところか何処かの待ち合わせに遅れたような感じの対応。

やっぱり光彦と元太の発言が自然的に子供の演技に戻してくれる。
俺的には以外に深く考える理由わけも必要なかった感じみたいだ。

——その代わり俺は周りに居る乙女おんなの心に気づけなかった。
トリック

犯人の行動が見抜けても・・・。

第7話【裏】：行動（後書き）

内容はわかりましたでしょうか!?

皆様のご感想やご意見をしばらくの間受付ようかと思えます。

期日は次回の続編まで・・・。

日にちは未定です。

次回からどんな内容に進むかお楽しみください。

第8話：心理（前書き）

<< 第七話【裏】まで読まれた方への警告 >>

第○章から第○話に変更になったことをご理解をお願いします。

<< 前回までの忠告とあらすじ >>

- 1、『第七話』と『第七話【裏】』が結合して第八話へ進みます。
- 2、前回までの話の流れは元太や歩美、光彦それに哀から再び戻ってくるコナン。
- 3、なぜ『第七話【裏】』が書かれたのかそこも見所かも・・・。

さあ、どんなことが起こるのかスタート！

第8話：心理

終止符のように光彦の言葉が流れてきた時には俺は畳の上に腰を落ち着かせようとした最中だった。

俺からみて左から光彦、元太、歩美が三人横一列に並び寺の住職や宗主のようにしっかりしたしつけで座つてる様子はなく一人一人個性のある座り方で自然体そのもの様子が見える。

歩美の横には光彦と人は居らずその場所は空白が出来ておりコナンの目の前には三人の背中が見える場所で腰を落ちつつけている様子でありその場所に歩み寄る哀の姿。

哀の両手にはファッション雑誌の本を読みながらコナンに話かけてきた。

「さっきの電話は彼女からだったの？」

「あつ、ああ・・・」

コナンと哀は目を合わす様子もなく会話し始める。

その代わりコナンの表情はどことなく考え込むことに気が付く哀。

「たとえばいくら電話で着たとしてもあなたの声を一言でも聞きたかったら2分以上電話で話すことなんてないんだから。」

「えっ!？」

哀はコナンの反応に気づきつつあるが雑誌の方に釘付けでコナンは

哀の顔をみてることすら止めようとしなない。

「そうでしょ！？普通用件だけで済ませばいいものなのに他に理由があるとしたらあなたの声しかないと思うけど！？」

「……………」

「あら違ったかしら？名探偵さん！？」

コナンが戻ってから初めて目を合わす哀の行為に暖かい気持ちが流れてくる感じがした。

いつもの哀では血が通った暖かい目には見えないコナンだが今回だけは違うものを見たように固まり始めてくる。

もし哀が言ったことが本当のことだとしてもたとえその答えが悪魔までその内容は一つの仮説に過ぎないためだ。

その話を聞いてたかのように乙女おんなの心がうずき、コナンの体に飛び込んできたのだ。

彼女は黒髪のストレートヘアにカチューシャの女の子、その彼女は自然に顔を上げコナンと目が合う。

その様子に気が付いた元太、光彦がコナンに怒鳴りつけてきた。

第8話：心理（後書き）

皆さん話の内容について行けてますか！？

問題！今回の話は作者が実際にあったことをなぞらえて書いた部分もあります。

そこで皆さんの推理して当ててもらおうかと思います。あとなぜその部分なのかご意見もお願いします。
さあ皆さん答えは当たるかな。

あと話の内容に不安の方はご意見をお書きください。

又は皆さんからのご感想もお待ちしています！

また次回の『小さな探偵君達』もお楽しみください。

第9話：キュートな女探偵（前書き）

第九話、公開日前に一通のメールを貰いました。

ペンネーム探偵団一員さんからです。

『いつも楽しみに読ませてもらってます。こんな時なのですが一番に次の内容教えて下さい！』って、メールアドレスすら書いてないので教えられません……。残念ですが……。

それでは第八話からの続き『キュートな女探偵』の始まりです。それは誰って……！？あの子ですよ。あの子！

それではスタート!!

第9話：キュートな女探偵

「おい！コナン！！」

「コナン君！！あなた何やってるんですか！！？」

元太と光彦の声で俺は今の現状を即理解出来る。

歩美の顔が俺の目の前に見え、歩美も俺の顔がすぐ見える位置に居るためだろう。

「よっ、吉田さん・・・！？」

同じようにその現状が灰原にも驚く一面に見えたのだろう。

歩美ちゃんの名前を言った途端に言葉を失ったように言葉が続かない。

「おっ、おい！光彦、元太！お前ら何か勘違いしてねえか！？」

俺はすぐに誤解に招く言葉に向かわないように対処しようと話かけた途中で歩美は俺に話しかけてきたのだ。

「コナン君！！」

「あっ、はい！？」

どうも吉田さんの目は真剣な眼差しで工藤君を見てたわ。

私には間に入り込む隙がないし、一旦立ち往生のようにその場を見送るしかない。

「コナン君は好きな人がいるの？」

「えっ!？」

「私聞こえちゃったの……。哀ちゃんと会話してた『彼女』って誰なの？」

「いや……。それは……。」

「一から説明すればわかる？」

俺の返事も待たずに歩美は今まで聞いた内容を語り始めた。

「哀ちゃんがさっきの電話は『彼女か』らだったの? って聞いた時に当たってるように『うん』って答えたわ。」

それにコナン君の行為が見えてるように哀ちゃんは、たとえいたずら電話で着たとしてもあなたの声を一言でも聞きたかったら2分以上電話で話すことなんてないんだから。って言ってるのも知ってるよ。」

それに普通用件だけで済ませばいいものなのに他に理由があるとしたらあなたの声じゃないと思うけど! ? って言った言葉もコナン君は否定しなかったわ!」

歩美の言葉はいかにも最初から最後まで聞いてた言葉。

「もしかして彼女って私達のクラスに居るの!？」

「えっ!？」

コナンは心と顔が違うことをするのが大変だった。

『なんで俺がガキ共と一緒に付き合わなくちゃいけないんだよ……』
『って頭で浮かべながら顔では驚いたような感じで対応。』

哀もその推理に少し笑いがくる。

コナンの今の現状もわかってた感じで一層笑いが目立つ。

「おい……。灰原!？」

「あら、ごめんなさい。」

「えっ!？」

「……。だって名探偵さんも大変そうねって思って少しね……。」

「あのな。」

「あれ!？違うの哀ちゃん……。?？」

「どうかしらね……。ねえ……。名探偵さん!？」

「おいおい……。」

歩美の言葉を最後までしっかりと聞いていた。自称『ニヒルな探偵』
が推理し始めた。

第9話：キュートな女探偵（後書き）

今回は自称『ニヒルな探偵』登場!!

そんな人物設定いたって方、ちゃんと居ますよ。

この小説でも一話から居ますよ。ほらあの方あの方・・・。

次回も『小さな探偵君達』よろしくお願いします。

第10話：自称『ニヒルな探偵』の推理（前書き）

とうとう彼の推理が始まります。

彼の推理は合ってるのでしょうか！？

今回は彼の推理が見所かも・・・！？

それではスタート！！

第10話：自称『二ヒルな探偵』の推理

「いいですか!？」

彼の右手はいつもように人差し指を立ててポーズ決め男らしく推理し始める。

「僕の推理はこうです!」

元太、歩美、コナン、哀が彼の推理に聞き耳を立て始めた。

「これは人間としての心理で人に見られたくないものだったら隠す理由がある。コナン君は携帯画面を見られなくなかったから人の目を盗んで電話したことになり、一番の証拠はその携帯の着信に隠されてると思われるのが僕の推理です!」

「凄い!光彦君!」

「さあ、どうする?名探偵さん!？」

あなたが考えてるようにあっさり時が過ぎると思えば意外にもう一人の探偵に気づかれたみたいね。」――

「さあコナン君の携帯の着信画面を今すぐ見せてください!」

「おい!コナン携帯の着信記録みせろよ!」

吹っ切れたような声でコナンはポケットの中に手を忍ばせていた。

「わあかったよ!そんなに疑うなら見てみるよ。」

彼のポケットから出された携帯電話は元太、光彦、歩美の順番に渡され私の手に送り出してきた。

「えっ！？私が見るの！？」

「私達じゃ見方がわからないんだもん。」

「はいはい。」

見た目は工藤新一宛の携帯がコナン宛の携帯が見分けが付かないものが私の手にたどり着き名探偵の顔には余裕が疑える。

名探偵の顔には目をとめずに歩美と光彦は着信先をたどっていく。

「みてみて！光彦くん。これ蘭お姉さんからだったんじゃない！？」

着信時間が当てはまりや着信先は毛利蘭の表示になっており歩美の誤解も切れたがまだ疑問がる探偵が存在する。

「おかしいですね。僕の推理ハズレちゃいましたね。」

「ハズレたより光彦君の推理は凄いよぉー！」

彼の顔にはさっきまで推理をしていた真剣な顔が彼女の声により赤いリンゴの色のほっぺたへ変わっていく。

「光彦！きつとコナンと蘭お姉さんと二人で晩ご飯の会話してて遅くなったんじゃないか！？」

「えっ!？」

「例えば今晚はうな重にするかとか。」

元太の発言によりコナンの不愉快な行為の会話が終止符が打たれ笑いが流れはじめる。

その代わり人の目を盗んで会話を始めた哀には少し笑みが見え何もかも見透かしたような会話でコナンに話し始めた。

第10話：自称『ニヒルな探偵』の推理（後書き）

今回はあの名探偵とあの名探偵を見透かしてるあの人の会話の内容から始まりますよ。

次回も『小さな探偵君達』をよろしくお願いします。

第11話：江戸川コナンⅡ工藤新一（前書き）

自称『ニヒルな探偵』の推理を終え、あの二人の会話。

それではスタート!!

第11話：江戸川コナンⅡ工藤新一

「あなた大変ね。」

「ん！？あの携帯のことか！？」

子供のように可愛いらしい表情で哀の顔を確認めるコナン。

「それも有るけど彼女の着信が工藤新一宛ってことがばれるのもまずいんじゃない！？」

「確かにまずいだろうな！」

探りのように質問を仕掛けた哀だが逆にその少年の顔にはその質問が来ることが予想付いてたようにあっさりと答えてみせる。

まるでその表情にはさっきまでの可愛いらしい顔は見えずどこがしら大人っぽい顔に変わったのがはつきりとわかった。

「『まずいだろうな！』ってあなた！もしあの子達があなたの携帯と違うつて思えばどう理由つける気だったのよ！？」

「理由なんていらねえよ。」

「えっ！？」

「だって、俺の携帯Ⅱ江戸川コナンⅡ工藤新一でもあるしな！」

勝ち誇ったような口元はさっきまでの少年とは違い一人の青年の発言に変わりつつある。

「それ答えになつてゐるの!？」

「答えにないのは二つの携帯は同じ型つて言うだけかな!？あいつらには悪いが携帯を二つ同時に見せない限り大丈夫だ。」

青年の発言は自身たつぷりのように聞こえるが裏返すと反面暗い顔が見えそうで怖い。

二つ同時に出されてもその時点にまた元太や歩美、光彦が疑問を作つてしまう行為が起こるかもしれない。

もしかしたら最近では一人あたり携帯を二台持つ人が多い理由で話が流せるかもしれない。

哀の中にはそれでいいのか疑問で押し殺されそうで怖い。その答えを聞きたく心の会話を始めた。

———
ねえ、工藤君!

どうしてそんなに自分が強く居られるの!？

今は厚い雲のようにあなたの心を覆い隠してるの!？

私に勇気をつけられるように無理に押し殺してるの!？

ねえ、教えて……工藤君……。

———

第11話：江戸川コナンⅡ工藤新一（後書き）

探偵団一員「おゝい！作者はどこだ？？」

NT「君の後ろだよ！」

探偵団一員「……！！……。」

NT「何か用でした？？」

探偵団一員「何もない！！！」

NT「うん！？君の名前探偵団一員さん！？」

探偵団一員「なぜわかった！？」

NT「わかるにもわかる……。名札してる限り。」

探偵団一員「うつ……。とりあえず今日は自分が言っぞ！！！」

NT「いや、言わなくてもいい……。それじゃ次回も『小さな探偵君達』をよろしくです。」

第12話：家主（前書き）

続きが気になった方更新遅れてすみません・・・。
最近リアルでは忙しくて忙しくて・・・。
今日は少し時間もあり更新です。

では早速スタート！

第12話：家主

哀はコナンに質問を投げかける言葉が見つからずに時刻は午後五時になろうとしている。

「そろそろ帰らないとまずいんじゃないか!?」

「そうですね。そろそろ片付けて帰らないと親が心配するので・・・」

光彦は時計の時間を確認しながらコナンの会話に賛成したかのうように光彦も片付けを始めた。

「俺もつとやりたかったぞ〜!」

その横に居た元太の欲望を放った言葉は虚しく光彦の手により片付けられていく。

片付けてる最中だろうかいつも聞き覚えのある年老いた男性の聲が家中に響いて聞こえてきたのだ。

「お〜い!皆まだおるのか〜!?!」

その男性の声はこの家の主、あがさひろし阿笠博士。通常みんなからは博士と呼ばれている。

その声に反応するかのように光彦と歩美は元気に迎える声が飛び交う。

「僕達はここに居ますよ〜!」

「博士どこか出かけてたの!?」

「まあそこら辺にの〜。」

少し笑みがこぼれる博士の顔に気が付いたのか一人の少年が推理を始めた。

「どうやらはがきのくじに当選したみたいだな。」

博士と光彦、元太や歩美、それに哀の顔には何のことを言ってるのが最初は意味もわからずにその少年の言葉が一点に集中し始める。

「コナン君、なぜわしが当選くじに行ってるってわかったんじゃ!?」

「わかるもなにも、ソファアの前らへんに置いてある机の上には同じような区内の地図がいくつも広げて置いてあるだろ!?」

それが意味することはその場所の下調べの意味。

あとその時点からはまだはつきりとわからないけどハガキの散らかりようと博士の様子から共通することはたぶん何か当選して帰ってきたってことだろう!?」

「さすがじゃな!」

「凄い!コナン君!まるで平成のホームズみたい。」

歩美は一種の探偵ぶりを見せたコナンにほめ言葉として送るが「これはホームズではなくてもわかるよ。」のコナンの言葉に机の方に視線を送る。

「このはがきの種類をしてみるよ。全部何かの共通することはこのスーパ―の広告とか載ってるだろう！？その会社はサービス制が高いって意味で一度くじでもしてみてはいかがですか！？意味でもおかしくないだろう！？」

「じゃがそれだけじゃ・・・。」

「それらをふまえて博士の顔を見れば一目瞭然いちもくりようぜんって訳さ！」

――さすがコナン君です。

僕の推理は外れてたのにこんな短時間に証拠まで見つけ出して当ててしまうとはまるで・・・。
まるで・・・。

小学生探偵とは言わずに大人交じりの名探偵に相応ふさわしいかもしれない。
――

光彦の心中では会話は出来ても口から発する言葉は何もかもコナンに負けてしまった感じで言葉が出ない。

まるで喉の奥から発する音まで消してしまったかのように・・・。

第12話：家主（後書き）

どこかで読んだフレーズって思った方いらっしゃったのでは!?

実は前話に出てきたあのシーンがこんなところに役に立ってしまいました。

次回も『小さな探偵君達』をよろしくお願いします。

第13話：僕の心（前書き）

続きが気になった方更新遅れてすみません・・・。
最近いろんなことがありますぎてリアルでは忙しくて忙しくて・・・。

では早速公開です！

第13話：僕の心

コナン君の話から続いて会話を始めたのが歩美ちゃんだった。

「コナン君っていつも推理の内容は凄いよね！？ねえ、光彦君！？」

「あ・・・、ああ・・・、うん・・・。」

僕的にはとつさのことでもあり反射的にすぐに答えを出せずに戸惑いながら答えてしまった。

一つの原因として考えられるのが僕が心理的な自分だけの世界に陥り、周りから話してくるとは夢にも思わなかった。

「光彦！どうしたんだ！？」

僕の行為が可笑しいのか顔を覗き込んできたのが噂どおりの彼の姿。コナン君だ！

「コナン君！あの・・・。」

僕の心理を打ち破る絶好のチャンスでもあるし疑問を投げかけるチャンス。

「あんだ！？光彦。」

彼の顔からは子供の顔だし心の疑問と言葉の疑問が交差する。彼の行為がおかしい訳じゃない。簡単に言えば言い出しっぺは僕なのに発言を止めてしまいタイミングを逃してしまった。

僕の心理的な内容から終止符として開放させてくれたのが彼女。
幼じみの歩美ちゃん。

「光彦く〜ん！そろそろ帰らないと！」

「あつ！はい！」

彼の顔には疑問点の顔が漂わせてしまった。

簡単に言えば話をしておきながら流した感じでもあるから疑問がるのもおかしくない。

「光彦！また今度な！」

「あつ、はい！」

僕のことがあったたような感じで彼には納得してもらうのもそんなに時間はいらなかったみたいだ。

その前に話を合わせてくれたかもしれない。

僕的には嬉しくもあつた。

彼の優しい行為が気を使ってくれてるのも感じ取れたのが今になって感じ取れる。

一人の男性として見たら同級生には思えない行動パターン。

普通の同級生の子らはきつと『何だよ！？光彦！』とか追い込みをかける言葉を言いそうなもの。

でも今回の行動パターンは彼にはなかった。

僕は阿笠博士^{あがさはかせ}の家を出て行く。

彼からの質問は何一つ飛び込まなかったのが言うまでもない。

僕の横には歩美ちゃん。

歩美ちゃんの横には元太君。

僕達の後を追いかけるようにコナン君がいる。

自分達の家が近くなるにつれて一人一人見送りながら姿は消えていく。

そう彼女もそう。

明日もきつと会えるからそれまでしばらくのお別れ。

次会う時は学校の登校の時か学校で会える。

彼女に会えないのは今だけなんだから……。

そうもう一人の彼女も……。

第13話：僕の心（後書き）

何だ！？この話はって思う方！

サブタイトルをよく読んでみてください。

『僕の心』ですよ！？ってことは・・・。

わかりにくかった方はコメントをお書き下さい。

それでは次回も『小さな探偵君達』をよろしく願います。

第14話：自称『少年探偵団のリーダー』（前書き）

前回はあの少年の内容だったんですが今回はあの少年。
ほらあの自称『少年探偵団のリーダー』ですよ。

第14話：自称『少年探偵団のリーダー』

光彦の考えもに鞭を受ける試練が与えられずに家に到着する。

時間は止まることも知らずに平然に一日の終わりを告げようと体を休ませる時が訪れる。

次第に太陽が昇ってくる頃には人々は活発的に動き始め、その数億人の中の一人元太が朝食を済ませ七歳児の少年が元気よく外へ飛び出していく。

第一発見者のおかつぱの少女。
同級生の吉田歩美を発見する。

「よお！歩美！！」

彼の目の前に歩いてたおかつぱの少女が呼び止められ振り向く少女。

「今日は元太君早いね。」

「いつも遅刻しかけばっかじゃ少年探偵団のリーダーとしてよくねえだろ！？」

「そうだね。」

彼女の顔には自然に笑顔がこぼれてくる。

元太はその彼女の顔を見るのが一番の喜びで幸せなひと時を手に入れた感じで嬉しかった。

時には時間は幸せな時間などお構いなしに歩美と元太の背後からとある少年の声が聞こえてきたのだ。

「歩美ちゃん！！元太くくく！！」

数秒後にまた同じ声が聞こえてくる。

「歩美ちゃん！！元太くくん！！」

彼の声は近くなるにつれて語尾らへんを伸ばす言葉が短くなってくる。

まるで距離を示すかのような言葉の使い方が変化していく。

次第に元太と歩美の近くに行けば『おはよう』の続きが『歩美ちゃん！！元太君！！』に変わっていた。

光彦も加わり三人の会話は自然に足を運ばせながら学校へ向かっていく。

学校に近づくにつれてランドセルを背負った子供ら大きなかばんを持ったサラリーマン風の大人、買い物袋を持ったおばちゃんが交差したりする。

その人ごみの中から現れたように三人の瞳の中には見覚えのある二人の後ろ姿を映し出された。

二人の姿は次第に学校の正門を通り越す。

その三名も後を追うかのように急に走り出した。置いていかれるって心理ではない。

少しでも楽しく会話をしながら登校したかっただけの行為。

第14話：自称『少年探偵団のリーダー』（後書き）

あいつは少年探偵団のリーダーではないって！？
一応彼自身はリーダーだと思ってるみたいですよ。

えっ、次はどんな内容だって！？

それは次回の『小さな探偵君達』をお楽しみください。
あと皆様のご感想お待ちしております。

第15話：僕の行動（前書き）

自称『少年探偵団のリーダー』からあの少年。
またあの少年って誰だよって!?

それは読んでからのお楽しみ。

それではスタート!

第15話：僕の行動

「コナンくん！哀ちゃん！」

僕のアイドル的存在の彼女が元太君と僕の瞳に映された同じ人物を呼び止めようとする。

僕も同じように彼らを呼び止めるつもりだったが彼と彼女が一緒にいる存在から言葉が浮かばずに彼らの側へたどり着いてしまった。嫉妬からじゃない、自分に勇気がでなかっただけのこと。

「おはようございます！コナン君、灰原さん。」

「よお！光彦、元太、歩美ちゃん。」

「おはよう。」

「おう！」

「おはよう！哀ちゃん、コナン君。」

皆から怪しまれないようにとつさに思いついた言葉が挨拶。

でも僕の一言により次々と皆は挨拶に回る。

皆に不自然に思われてないみたいだったようだ。

自然に心が少し潤った感じで嬉しかった。

きつと寝てる間に自分の心の種が乾きつててコナン君に対する言葉が失われていたみたいだ。

五人揃って学校の建物内へ入っていく。

建物内は二足制の為に上靴へ履き替える動作へ移していく生徒達。

そろそろ授業が始まる時間が近い為なのかなり混雑してる様子だ。

「おい！おめえら先に行ってるぞ！」

「あつ！待って〜！」

「おう！」

その様子を知ってか彼の声で皆を動かしていく。
まるで黒ぶちのメガネの少年にひかれるかのように。

「わぁ！」

焦って行動を取ったせいにか上靴がちゃんと履けてなかったみたいで
前にこけそうになった僕・・・。
その時に優しい一言が飛び込んでくる。

「円谷君、大丈夫！？」

彼女は僕の前に居たためか心配して声をかけてくれ様子だ。

「あつ、はい。」

僕の奥の底には嬉しい反面恥ずかしい感じがした。
だって、彼女にも格好いいところを見てもらおうとしたけど朝から
ドジを踏んでしまった為だ。

「江戸川君達、先に行ってしまったみたいね。」

「そうですね。」

僕の目はずっと下を向き彼女の顔が見れない。

その様子を知って知らずか彼女はクールにリードしてくれた。

その彼女の行為は僕に一つの勇気としてくれるに違いない。

第15話：僕の行動（後書き）

元太「今回の俺の台詞短くねえか!？」

NT「かなり長くはしたつもりですが!？」

元太「えっ!？あれで!？」

NT「まあまあそんなに怒りなさんなよ。」

元太「じゃ次回は俺が主役で!!」

NT「おい!それはこの私が決めることで元太君が決めることではないよ!？その前に君は第14話でほぼ主役みたいな感じで書いてるんだけど!？」

元太「えっ!？マジで!？」

NT「マジですよ。」

次回も『小さな探偵君達』をお楽しみください。

次の更新日はリアルの事情により未定です。」

第16話：黒ずくめの女（前書き）

読者の皆さん大変お待たせしました。

ようやく光彦からどんな転回が来るのか見所ですね。

今回も光彦が主って思う方がいらっしやるのでは!?

それは読んでみてのお楽しみ・・・それでは『小さな探偵君達』を
スタートです！

第16話：黒ずくめの女

僕と灰原さんは沈黙を漂わせながら廊下を歩いていく。

その廊下には障害物も置かれてない、有るとしたら端にひっそりと置かれている消火器が一個二個あるぐらい。

もう少しで1年B組の教室へ到着する。

——それまでにはコナン君、歩美ちゃん、元太君が見えると心の奥の底で願っていたのか灰原さんの顔には平然を装った少し悲しい横顔にも見えた。——

僕が灰原さんの顔を見てることをお構いなしのように平然に扉を開けて行く。

扉の向こうにはコナン君の姿が見えた。

歩美ちゃんと元太君の姿もコナン君の側に居るのに灰原さんの瞳にはコナン君にしか送ってない感じにも見える。

扉を開けてから一番最初に声をかけてくれたのが元太君だ。

「おめえら！見ろ！依頼書だぞ！」

「えっ！？本当ですか！？」

「今日下駄箱の中に有ったんだぜ！」

私は彼らにばれないように人目を忍んで彼と話し込む動作に移す。

怪しげな大人の会話をしたいんじゃない。彼と話をする時には少し自分の演技に一息入りたいだけ。

彼の言葉からは決まって『あんだよ』。灰原』しか聞こえてこない。相手は恋人ではないし幼じみでもないのもわかるけど、とある彼女の対応とかなり異なり変わってしまう。

彼自身はその言葉には気を止めずに自然に話題を変え始めてきた。

「そっといえば灰原。」

「なあに？」

「あれ以来変わってねえのか??」

「あれ以来来て??」

「ほら……。」

彼の言葉が濁った後に突き刺さるような冷たい目線を感じたのか彼は後ろを振り向いていた。私も彼の後を追いかけるように目線の後を送ってみると吉田さん、円谷君の姿が疑える。

私は二人の行動を試すつもりで平然を装った発言を言ってみせようと試みる。

「どうしたの? 吉田さん、円谷君……。」

「まさかおめえら俺らの話を盗み聞きしようとしてたのか!??」

——名探偵さんは私の言葉の続きに気が付いてたみたい。何故か

私の心が読まれた感じで変に嬉しくもあったわ。どうして……！
――？

奥そこで何かが弾けて揺れる私の心身。

それを感じ取ったように電話中だった会話が急に切れたようにぷつりと急に周りの音や吉田さん、円谷君の声が聞こえなかった。耳をふさいでもいない。

まるで周りに薄い透明なガラスを張られたような感じにも思える。

「おい！？どうしたんだ？？灰原。」

彼の言葉により私の周りにあつた薄い透明なガラスはあたかも彼の言葉により簡単に壊れて消えた。その瞬間に私を正真に戻してくれた。

私の返事は決まって『何もないわ。』だけ彼にはどんな風に聞こえたかわからないまま一時間目の授業が始まる。

第16話：黒ずくめの女（後書き）

??「作者は居るかしら!？」

NT「居ますよ。まっ、まさかこの平然を装った口調といえば・・・」

灰原「そうよ。私よ。」

NT「何か質問ですか??」

灰原「質問も何もあの文・・・」

NT「あの文!？」

あれね!？」

話を通じないままですがとりあえずここまで・・・!」

灰原「ちょ、ちよっと・・・」

NT「それでは・・・」

灰原「まっ、待って・・・」

NT「次回の小さな探偵君達をごらんください。（リアルの事情により遅れる可能性があります。）」

第16話【裏】：Cool Guy（前書き）

およそ五ヶ月ぶりの続編の作品お待たせしました。

久々で作品ながら【裏】表示。

内容はほぼ変わらないのですがサブタイトル通りに少し視点を変えて公開。

内容としてはかなり重要でもあるので少し楽しまれながら読んでいただけると幸いです。

第16話【裏】：Cool Guy

「俺たちだけで先に行ってもいいのか!? コナン。」

光彦と灰原を置いていったことを後悔するかのように元太が疑問そうに話かけてくる。

「バアロー、行く場所は一緒なんだからよ。先に行っても変わりねえよ。」

「そうそう、あの二人は二人で何とかいけそうだしねえ。」

「おいおい、歩美ちゃん……。」

そう考えれば、光彦を信用してないってわけじゃないがあいつの側にずっと居ててあいつの為にならないこともある。学校まで『守って』って言うようなお姫様でもなく俺は王子様でもないし騎士でもない。一番一息入れさせてたい居場所も今のあいつには必要不可欠。

俺の考えを他所に一人の女の子の視線に気が付かなかったのが今の俺。

しばらく消火器やら二、三個過ぎていくと1年B組の標示が見えてきて次第に教室に近づいてくる。

俺は無意識に左手がドアに触れた瞬間だろうか彼女の右手も触れていた。

「あつ、ごめん……コナン君。」

「えっ!？」

「うんうん……なんでもない。」

彼女の言葉が終わりがけたぐらいだろうか下を向く前に一瞬彼女の

顔が赤く見えたのは気のせいか！？
元太が察したのか歩美の顔の色に気が付く。

「あれ！？歩美顔赤くねえか！？」

「気のせいだよ！教室と廊下の温度差が違いすぎて急に顔が温まったんだよん。」

「確かに今日の教室暖けえよな。」

俺の言葉と同時に急に扉が開き出す。

扉を開ける音に反応してか、一番最初に声をかけたのが元太だ。

「おめえら！見ろー！依頼書だぞ！」

「えっ！？本当ですか！？」

「今日下駄箱の中に有ったんだぜ！」

人目を忍んでか灰原が横にやってくる。

あいつはなぜか俺の考えと違い俺の前だけ子供の演技に一息入っていたような気もする。

俺の言葉はそっけないが『あんだよ』。灰原『しか反応できない。相手は蘭ではないし幼じみでもないのもわかるけど、少し区別してしまってる発言にも聞える。』

周りに怪しげな会話に聞えないように俺は自然に会話を変えてみる。

「そっいえば灰原。」

「なあに？」

「あれ以来変わってねえのか??」

「あれ以来来て??」

「ほら……。」

俺の背後から突き刺さるような冷たい視線を感じたのか俺は自然的に後ろを振り向いていた。その視線の先には歩美、光彦の姿が疑える。

以外に平然を装った発言を歩美と光彦に言い放つ灰原。

「どうしたの？吉田さん、円谷君……。」

俺の耳にはかなり肝を座ったような発言にしか聞えて仕方がない。

「まさかおめえら俺らの話を盗み聞きしようとしてたのか!??」

俺が会話した途端に灰原は何か驚きを隠している様子だ。
俺は自然的に灰原の心を覗き込むように話しかけてみる。

「おい!??どうしたんだ??灰原。」

「何もないわ。」

あいつの心が読めずに俺はその場を自然に流した。
一つ一つの行為に疑問を抱かないまま、チャイム音が平然と響いて

くる。

もう少いで一時間目の授業が始まる。

第16話【裏】：Cool Guy（後書き）

ちよつと違った視線で楽しまれたようでしょうか!?

【裏】って言っても後々必要な部分でもあるのでかなり作者としては少し面白半分で仕上げてみたかと思つて書き上げています。

主役が少年探偵団ですから公平に登場させるのがかなり難しいのが作者の欠点でもあります。

まだまだ続く『小さな探偵君達』次回もお楽しみ下さい。
今回の更新日は未定です。

第17話：元太少年（前書き）

皆様、お待たせしました！

続編の『小さな探偵君達』です。

今回はタイトル通りの内容になっています。
リアルの授業と重ねずにお読み下さい！

第17話：元太少年

「歩美！何でいつもコナンのことばかり見てんだ！？俺にも振り向いてくれよ！」――

一人の少年はアイドル的存在の歩美に視線を送り続ける。

彼女の動作は自分の席から丸見えでたまにやきもちの場面が見えてしまう。

隣にいた『ニヒルな探偵』が俺の顔を覗きこんでくるように話かけてきた。

「元太君、凄い難しい顔してどうしたんですか？？」

声かけられた途端に一瞬眉と眉の間の筋肉がゆるむ。

それと同時に光彦の声に反応するように歩美が俺の顔に視点を置いていく。

このまま答え見つからなければ歩美に気づかれないように自分の手で顔の熱りを下げたい、そのまま上昇すれば顔をすっぽりと覆ってくれる仮面をかぶってまでその場から逃げ出したい。

そんな気分だった。

俺の気分を他所に俺の席の後ろから小声でコナンが話かけてきた。

「おめえら何やってるんだよお。」

「（……えっ！？）」

俺の中のライバルでありカッコつけの男の前では言い訳すら思いつ

かなかったのに光彦がすぐに返事をする。『一瞬元太君が難問でも当たったのか聞こうと思って』っと言うがさすが疑問がる返事がやってくる。

「難問!？」

「そうそう難問クイズですよ!多分コナン君なら簡単に解いてしまうものですよ。」

コナンはつまんな顔になり質問をするのを止めた。

「今日の放課後はとりあえず今日の依頼書を解決してからさっきの行為の理由教えてくださいね!」

俺の心を見透かしたような声には言い訳する言葉が思い浮かばなく時が刻んでいく。

第17話：元太少年（後書き）

かなり授業中ってこともあるのに私語がメインの内容になってしま
いましたようなそんな内容。

まだまだ続く『小さな探偵君達』

次回の更新日は未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674b/>

小さな探偵君達

2010年10月9日20時28分発行